

投稿論文

ライシーム運動における教授情報の普及とその理念
—— 1830年代前半のマサチューセッツ州のタウンにおいて ——⁽¹⁾

古川 明子*

The Diffusion of Information of Instruction in Lyceum Movement:

On the case of towns in Massachusetts in the early 1830's.

Akiko FURUKAWA

1830年代前半のアメリカ・マサチューセッツ州においてはペスタロッチ法に依拠した教授法を定型化し、公立学校へ導入することと、教授法を身につけた専門職としての教師養成が目指された。本稿では、こうした公教育制度の文脈のみならず、1830年代前半のマサチューセッツ州において展開されたタウン住民の学習運動、すなわちライシーム運動においても教授情報の普及が促されていたことを明らかにした。ここでの教授情報とは、アルファベット、数え方、幾何学、地質学、植物学等の分野の教授内容・方法、教授に使用される教科書・器具、に関する情報である。ライシーム運動においては、定型化された教授法を提示するのではなく、親・教師・タウン住民にむけて教授情報が発信され、住民の自発的な教え合い、学び合いを通して、それらの情報が獲得されることが目指された。こうした教授情報の普及は、タウンにおける教育を、親・教師・住民の相互支援によって担っていくために促された。

1. 課題の設定

(1) 1830年代マサチューセッツ州公立学校における教授法改善の動向

本稿の目的は、公立学校における教授法の改善と普及が進められた1830年代アメリカ・マサチューセッツ州に焦点を当て、同時代に高揚したライシーム(Lyceum)と呼ばれる、タウン住民の自発的な学習機関の設置運動において目指された教授に関わる情報普及の実際と、それを支えた理念を解明することである。

1830年代のマサチューセッツ州では、州教育委員会に代表される公教育行政機

※筑波大学教育学系

関の整備、無償・中立のコモン・スクールの設置と拡充、教員養成制度の構築等、公教育の制度化が進められていた。また、法や制度上の整備のみならず、学校の教室空間における教授、学習のあり方をもシステムティックに改善することが目指されていた。すでに1800年代にはプロイセンにおいて教授方法の改革が進み、ペスタロッチ法の公教育への導入がはかられていたが⁶³、マサチューセッツ州において公教育における教授法改善が目指されたのは、1820年代後半以降であった。例えば、マサチューセッツ州初代教育長ホーレス・マン（Horace Mann, 1796-1859）に先駆けて公立学校の整備と師範学校の創設を構想したジェームズ・カーター（James Cater, 1795-1849）は、同州の公立学校における体罰や暗誦といった伝統的な教授法、モニトリアル・システムの効果を問題視し、ペスタロッチ（Johann H. Pestalozzi, 1746-1827）の教授理論、教授法（メトード）に影響を受けた明確で定型化された教授法の公立学校への導入を目指した。さらに、このような教授法と教科に関する知識を身につけた専門職としての教師の養成を目指し、教師養成機関の創設を課題とした⁶⁴。

また、1837年にマサチューセッツ州初代教育長に就任したマンは、ペスタロッチの教授理論、教授法を「第七年報」（1843年）、「第九年報」（1845年）において紹介した⁶⁵。マンは1843年に視察したプロイセンの学校における「図画」の教授法がペスタロッチの教授理論にもとづいているとみなし、教育長として設置運動に携わっていたアメリカ合衆国民共通の学校であるコモン・スクール（common school）に、ペスタロッチの教授理論にもとづく図画教育を導入することを提起した⁶⁶。さらにマンは学年、学級別の教授を可能にする公立学校制度の再編成を主張した⁶⁷ほか、専門職としての教師の養成が公立学校の繁栄につながるとして、1839年に州立師範学校を創設した⁶⁸。

このようにカーターやマンに代表される教育改革者は、ペスタロッチ法に依拠して、マサチューセッツ州の公立学校における正規の教科、ないしこれから導入が望まれる教科の教授法の定型化を試みた。彼らは州内の公立学校が準拠すべき教授法のスタンダードを提示すること、さらには専門職としての教師の養成システムを確立することを主張した。このように、1830年代のマサチューセッツ州において公立学校の教授法を改善し、教育実践、教師養成の両側面から、公教育を制度化することが目指された。

この時代にマサチューセッツ州を中心とするニューイングランド地方で開発さ

れた新しい教授法を、アメリカの教育史家ホーガン (David Hogan) は「ニューイングランド・ペダゴジー」(New England Pedagogy) と呼んだ⁶⁾。また、北野秋男は子どもの興味や関心を尊重し、主体的な活動に基づく学習を展開しようとした「ニューイングランド・ペダゴジー」が、体罰や競争といった強制力ではなく、教師への「愛」や「良心」によって子どもが自発的に学校の規律に従うようになることを目指したものであったと解釈した⁹⁾。このように、19世紀前半における新しい教授方法の改革と普及は、先行研究においては主にニューイングランド地方のエリート層による公教育普及の実態の解明と関わって論じられてきた。

(2) 本稿の目的

しかしながら、19世紀のニューイングランドにおいて新しい教授法が提唱されたのは、こうした公教育制度の文脈においてのみではない。成人から青少年、さらには子どもまでを対象として想定する地域住民の学習運動の文脈においても、新しい教授方法が提唱され、その普及が目指されていた。そうした動きを見出すことができるのが、住民の学習機関ライシームの設置運動である。

筆者はこれまで、ライシームの設置運動に注目し研究を進めてきた。その結果、タウンに設置されたライシームにおいて住民が相互に教え合い、学び合う「相互教授」(mutual instruction) の活動が実施されていたこと¹⁰⁾、そこでは刊行物を媒介として科学的知識に代表される「実用知識」(useful knowledge) の普及が目指されていたこと¹¹⁾、といった実践的特徴が明らかになった。また、こうしたタウン住民の学習活動のみならず、ライシーム設置運動においては学校教育への関与もみられ、アメリカ合衆国民共通の学校であるコモン・スクールの設置構想¹²⁾や、州教育委員会制度の萌芽ともいべき構想が提起されていたことも明らかにした¹³⁾。

このようにタウン住民の学習のみならずコモン・スクールの推進とも関わりを持っていたライシーム運動において、教授に関わる情報普及の推進がなされていた。ここで言う教授に関わる情報とは、アルファベット、数え方、幾何学、地質学、植物学等の分野の教授内容・方法、教授に使用される教科書・器具、に関する情報を指し、そこで紹介されている教授方法は「戸外での活動」、「観察」、「調査」、「会話」等の具体的・実際の活動を重視していることに特徴がある。ライシーム運動においては、刊行物『週刊ファミリー・ライシーム一家庭・学校・ライシームにおける教授と楽しみ』(Josiah Holbrook ed., *The Family*

Lyceum, designed for instruction and entertainment, and adapted to families, schools and lyceums, no. 1-52, 1832-33. 以下『週刊ファミリー・ライシーム』)を媒介に、それらの教授情報が教師のみならず、親、さらにはタウン住民に向けて発信され、住民の「相互教授」を通じてそれらの情報が獲得されていくことが目指された。本稿ではこの『週刊ファミリー・ライシーム』を素材とし、公教育制度における教授法定型化の動向（特にペスタロッチ法の導入）との対比のもとで、ライシーム運動においてなされた新しい教授方法の提言と教授情報普及の特徴を明らかにしていく。

『週刊ファミリー・ライシーム』を媒介とした情報普及活動は、これまでアメリカのゲイル (Ray Angela Gail) によって研究されている。以下ではゲイルの先行研究を紹介し、その教授情報普及に対する評価との対比のもとで、本稿の課題を明確にしていく。ゲイルは博士論文「生徒・観衆・市民—19世紀のライシームにおけるアメリカ大衆文化の表出—」(“Pupils, Spectators, Citizens: Representations of United States Public Culture in the Nineteenth-Century Lyceum,” 2001) において、ライシーム運動が「理想的な教え・学びの実践モデル」を、『週刊ファミリー・ライシーム』を媒介に民衆に対して普及していたと指摘している。ゲイルは「理想的な教えと学びの実践モデル」が「白人、プロテスタント、ニューイングランドの教育あるエリート層に支配的な規範 (norm)」に基づいて導出されたものであったとし⁽¹⁴⁾、その普及を通して、「自己教育」(self-education) と同時に、他者に対する教育の責任を負うことができる「理想的な市民」像が自己形成のモデルとして民衆に示された、としている⁽¹⁵⁾。

このようにゲイルは、ライシーム運動における教授に関わる情報普及の目的を、教育の担い手たる市民の形成であると考察した。しかしながら、その考察の過程において教授情報の普及の対象となったタウンの教師・親・住民と、コモン・スクール教育との関わりについては十分に検討されているとはいえない。1830年代のマサチューセッツ州ではカーターやマンら教育改革者によって公教育の制度化、コモン・スクール教育の改善が目指されていたが、ライシーム運動においてはタウンに居住する一般の教師・親・住民こそがコモン・スクールにおける教育の担い手であると構想されていた⁽¹⁶⁾。ゲイルの研究では、自己と他者の相互向上を目指す「相互教授」の主体としての市民像が打ち出されているものの、コモン・スクールの担い手としての市民像は示唆されていないのである。こうし

た事実から、本稿では一般の教師・親・住民の自発性に価値を置くライシーム運動独自の構想との関わりから、教授情報の普及の意味を考察する必要があると考える。

ライシーム運動において、同時代のカーターやマンによって期待が寄せられた教授の専門職ではなく、広く親やタウン住民に対しても教授に関わる情報の普及が試みられていたのは、どのような理念に基づいていたのか。教授情報の普及を通してタウン内の教師・親・住民をどのように形成していくことが目指されたのか。こうした点を明らかにすることにより、公教育の推進という1830年代マサチューセッツ州が抱えていた問題に対するライシーム運動独自の関わり方がみえてくると考える。

2. ライシーム運動における教授情報の普及

(1) 教授の内容に関する情報

1830年代マサチューセッツ州のカーターやマンによる教授法改善とほぼ同時期の1832年に、ライシーム運動の創始者ホルブルックは『週刊ファミリー・ライシーム』を刊行し、同誌を媒介として教授に関するさまざまな情報を発信した。『週刊ファミリー・ライシーム』は、1832年7月28日から翌33年8月10日までに全52号にわたって発行された週刊誌であり、毎号20数件のコラムで構成されている。それらはすべて無署名であるため、執筆者を確定できないが、他誌からの引用記事以外はほとんどすべて編集者であるホルブルック自身によって執筆されたものと推定される。『週刊ファミリー・ライシーム』では全973のコラムのうち157が教授情報を扱っている⁴⁷⁾。

最初に教授の内容についてみていこう。『週刊ファミリー・ライシーム』では、教授が望まれる分野として「数え方」(counting)、「アルファベット」、「化学」、「幾何学」、「地理学」、「筆記法・手紙の書き方」、「地質学」、「博物学」、「気象学」、「植物学」が挙げられている⁴⁸⁾。次の表1は、教授の分野と教授される場所についてまとめたものである。

このように『週刊ファミリー・ライシーム』では、タウンにおける家庭、学校、ライシームの三ヶ所を対象に情報が提供されている。ここで言う学校とは、タウンにおいてすでに設置されていた公立の学区学校(district school)のみならず、当時マサチューセッツ州の教育関係者の間で設置の必要性が認識され、その

表1. 教授が望まれる分野とそれぞれの分野が教授される場所

分 野	家 庭	学 校	ライシーアム
数え方	○		
アルファベット	○		
化学	○		
幾何学	○	○	
地理学	○	○	
筆記法・手紙の書き方		○	○
地質学		○	○
博物学		○	○
気象学		○	○
植物学		○	○

(出典) Josiah Holbrook ed., *The Family Lyceum, designed for instruction and entertainment, and adapted to families, schools and lyceums*, no. 1-52, 1832-33. をもとに筆者が作成した。

あり方が議論されていたアメリカ合衆国民共通の学校であるコモン・スクールも含まれている。教授内容としては、家庭の場合では読み・書き・算の基本となる「数え方」, 「アルファベット」, 「幾何学」等が、学校、ライシーアムの場合では実用的な科学の諸分野の知識がそれぞれ挙げられている。以下では、家庭における教授内容の例として「数え方」・「幾何学」・「アルファベット」を、学校およびライシーアムにおける教授内容として「地質学」・「博物学」・「植物学」を取り上げ、それらの教授方法の特徴をみていくことにする。

(2) 家庭における教授の方法 (数え方・幾何学・アルファベット)

① 親による教授の問題点

『週刊ファミリー・ライシーアム』28号掲載のコラム「家庭の教授」(“Family Instruction”)において、家庭における「数え方」・「幾何学」・「アルファベット」の教授方法が紹介されている。ここでは、親によって子ども(2~5歳)に対してなされる「数え方」(counting)の教授が孕む問題点を指摘することから論がはじめられている。「数え方」は「親によって子どもに与えられる最初の正規の教授(the formal instruction)」であるとみなされているが、その親による教授は二つの誤りを含んでいるとされている。一つは子どもに「数え方」を教える時期が早すぎるという点であり、もう一つは「数」の概念が子どもに定着する前に、「数え方」の反復練習をさせてしまう点である。こうした教授上の誤りからは、反復練習することで「1, 2, 3, 4…」と機械的に数を読み上げることはできても、

実際場面でもの個数を数えることができない、という弊害が生じるとみなされている。

次のような子どもの例が挙げられている。三角形や四角形、五角形等の図形を与えられると即座にそれらの名称を答えられる子どもがいるが、その子どもは「指2本と指1本、合わせて何本か」という質問には正しく答えられない。つまり、その子どもは、それぞれの図形の特徴を映像的に認識し、その認識と記憶している「三角形」、「四角形」、「五角形」という名称をマッチングさせることで質問に即答しているのだが、「数」そのものを理解しているわけではないのである。ここで問題とされているのは、「1, 2, 3, 4」という「数え方」にせよ、「三角形」、「四角形」等の図形にせよ、機械的に「名称」を読み上げさせることだけに終始している親による教授のあり方である。

②認識の発達過程

こうした問題点を踏まえた上で、「数え方」より先に子どもにとって重要となる学習対象が提起される。それは「もの」(things)について、すなわち「もの」の名前 (names), 特性 (properties), 使用 (uses) についての学習である。たとえば、子どもは「ある種の動物がネコであり」(名前), 「ネコは走り, かみつき, ひっかき」(特性), 「ネズミをとる」(使用), ということをして「足が四本」と数えられるようになる前に学ぶ。このように子どもははじめに、身近なものの「形」(shape) や「形態」(form) を認識するのであり、数について認識するのはその後である、という認識の発達過程が示されている。その上で、子どもの認識の発達過程を考慮し、「数え方」の教授に先駆けて、「形」や「形態」をあつかう「幾何学」の教授を行うことの必要性が提起されている。

③幾何学とアルファベットの教授方法の融合

家庭において幾何学を教授する必要性が提起された上で、具体的にその方法が提示されている。コラムでは以下の図形が掲載されている。

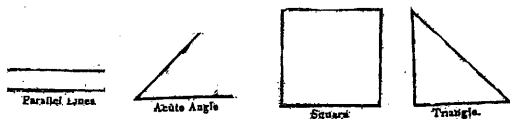


図1. 図形

(出典) “Family Instruction”, Josiah Holbrook ed., *The Family Lyceum, designed for instruction and entertainment, and adapted to families, schools and lyceums*, no. 28, 1833.

親はこうした図形を子どもに示し、辺の数、角の大きさ等について説明を加えながら子どもにそれぞれの図形を認識させていく。映像的ではなく、辺と角の構成に注目させながら分析的に三角形や四角形等の図形を認識させるのが、ここで提示されている教授方法の特徴である。

さらにこの教授方法は、アルファベットを子どもに教えていく際の方法にも適用されている。ここでは以下の「幾何学的文字」(Geometrical Letters) が掲載されている。



図2 幾何学的文字

(出典) “Family Instruction”, Josiah Holbrook ed., *The Family Lyceum, designed for instruction and entertainment, and adapted to families, schools and lyceums*, no. 28, 1833.

この「幾何学的文字」を用い、子どもに対し「Hにはいくつの線と角があるか」といった問いかけをしながら、幾何学の場合と同様に辺と角の構成からそれぞれの文字を認識させ、覚えさせていく。こうした「文字の分析」(analyzing the letters) がアルファベットの教授方法として紹介されている⁽¹⁹⁾。

このように『週刊ファミリー・ライシウム』においては、家庭での教授方法として、言葉で「名称」を教えることに先だつて事物の「形」を全体的に把握させ、次に事物を部分的に観察し分析的に捉えさせる、という方法が紹介されている。また、子どもの認識過程にしたがつて教授の過程を編成していく必要性が説かれている。ここではペスタロッチの教授理論、教授方法については直接的に言及されていないが、こうした『週刊ファミリー・ライシウム』で紹介されている教授方法の特徴は、ペスタロッチ法の影響を思わせるものである。

(3) 学校・ライシウムにおける教授の方法 (地質学・博物学・植物学)

次に、学校・ライシウムにおける教授の方法について、「地質学」、「博物学」、「植物学」それぞれの分野からみていこう。

①地質学

地質学を教授の対象とする意義について、地質学が「健康で教育的な楽しみ」(healthful and instructive amusement) を与えると考えられている。地質学の教

授は学校だけで完結することが目指されているのではない。子どもたちが地質調査や鉱物標本収集を「趣味」とし、学校を離れて地域に帰っていったあとでも楽しみながら学習を継続していくことが目指されている。さらに「地質学以上に実的な科学はない」とし、「農夫に土の性質と地味を改善するための方法を熟知させる」という実用性の側面からの意義が示されている。地質学の方法として「観察」(observing)と「調査」(examining)が挙げられている。「観察」は数多くの鉱物標本を用意し、子どもたちが自分の目でそれらの標本をみて識別することであり、「ものの形を識別する訓練」、「想像力と鑑賞力の向上」につながると考えられている。また、「調査」は地図を携えて、タウンの地質を調べ、鉱物の収集を行うことである。これら「観察」、「調査」の活動にもちいるために、鉱物標本の寄贈、マサチューセッツ州すべてのタウンの地図を収集しタウンの学校、ライシアーアムに配布することも検討されている⁽²⁰⁾。

②博物学

博物学の教授方法として挙げられているのは、「会話」(conversation)である。「博物学：会話」(“Natural History: Conversation”)と題したコラムが1833年5月4日発行の38号から7回連載され、毎回「少年たち」が「フィリップおじさん」への質問と応答を繰り返しながら自然事象と「神の意思」について学んでいく様子が描かれている⁽²¹⁾。「観察」や「調査」といった科学的な方法ではなく、博物学の教授方法として「会話」が取り入れられているのは、博物学が森羅万象のメカニズムを通して、「神の意思」を見出すという宗教的な目的から導入されているためである⁽²²⁾。「少年たち」が年長者(「フィリップおじさん」)との「会話」を通して、自然物を媒介としながら「神の意思」の理解へと導かれていくことが知られている。

③植物学

ホルブルックは植物学の教授方法を示していないが、コネチカット州の初代教育長ヘンリー・バーナード(Henry Barnard, 1811-1900)は、後年『アメリカ教育誌』(*American Journal of Education*, 1860)上の論説「回顧：ジョサイア・ホルブルック」(“Josiah Holbrook”)で、ホルブルック自身がアメリカ各地の学校に導入した「植物学」の教授過程を以下のように紹介している。

1. 学校の近くの野原に生徒を連れ出す。
2. 生徒にさまざまな形の葉を収集させ、集めた葉の形の類似点、相違点を綿

密に観察 (observation) させる。

3. 教授者と生徒との間で会話形式の問答 (conversational question and answer) を繰り返し、葉の形について討論 (discussion) する。
4. 教室に戻り、生徒に集めてきた葉の押し葉を作らせる。
5. 後日、教授者の指導の下で幾何学の教授の一環として、生徒に押し葉の形を模写 (imitation) させる⁽²³⁾。

このようにホルブルックは、「戸外での活動」、「収集」、「観察」、「会話形式の問答」、「討論」、「模写」等の、具体的かつ実際の活動を通して、生徒が植物学の基本的知識を獲得する方法を推奨した。

以上のように、『週刊ファミリー・ライシウム』で学校およびライシウムにおける教授方法として紹介されているのは、「地質学」、「博物学」、「植物学」といったそれぞれの分野の内容から導き出される方法であった。その方法とは、幼児を対象とする家庭における教授が認識の発達過程にそった系統的な方法であったのに対し、日常的・実際の活動を通じて知識を獲得させる方法であった。

(4) 教授器具、教科書に関する情報

『週刊ファミリー・ライシウム』では教授場面で使用される教授器具 (apparatus)、および教科書に関する情報も紹介されている。教授器具の種類は下の表2のとおりである。

こうした教授器具に関する情報を提供するのには、「数え方」・「幾何学」・「アルファベット」等の教授、「観察」、「調査」等の実際の活動を行っていく際にこれらの器具が必要不可欠だからである。加えて、家庭、学校、ライシウムそれぞれの場で購入された教授器具をそこだけのものとしなくて、相互に利用し合う計画が

表2. 家庭、学校、ライシウムそれぞれにおける教授器具

使用場所	教授器具
家庭	知育玩具、アルファベット・数・初級算術・図形・幾何学・地理学の学習セット
学校	鉱物標本、地球儀、博物標本、滑車、太陽系儀、軸、ポンプ、気象データ、地質学・地理学地図、幾何学の図表、そろばん、地理学・算術・幾何学・天文学の学習セット
ライシウム	天文学・自然哲学・化学器具、博物学のキャビネット、鉱物標本

(出典) Josiah Holbrook ed., *The Family Lyceum, designed for instruction and entertainment, and adapted to families, schools and lyceums*, no. 1-52, 1832-33. をもとに筆者が作成した。

構想された。こうした計画の実現を通して期待されたことは、家庭、学校、ライシームが「お互いにすばらしくよい仕事を通して助け合い、コミュニティ全体で楽しみ (entertainment) や教授 (instruction) が相互に提供される」ようになることであった⁽²⁴⁾。また、『週刊ファミリー・ライシーム』臨時増刊号では「定評のある教科書リスト」(“List of Approved School Books”)と題して、60冊の教科書がリストアップされている⁽²⁵⁾。

3. ライシーム運動における教授情報普及の理念

(1) 教授者としての親・教師・住民

以上のように『週刊ファミリー・ライシーム』では、家庭、学校、ライシームにおける教授の内容と方法が紹介されている。その内容・方法の特徴は、すでに見てきたように教授される側の発達段階によって異なる。子ども(2~5歳)に対しては、「数え方」・「幾何学」・「アルファベット」等の内容がペスタロッツ法を思わせる認識発達に応じた方法によって教授される。それ以上の年齢層に対しては、「地質学」、「博物学」、「植物学」等の科学の諸分野に関する知識を「戸外での活動」、「観察」、「調査」、「会話」といった日常的・実地的活動を通じて獲得させる方法が適用されている。ライシーム運動においては、こうした教授内容・方法や、教科書・教授器具に関する情報が、刊行物『週刊ファミリー・ライシーム』を媒介として発信されていたのである。

これらの情報は家庭における親、学校における教師、ライシームにおける住民の三者に向けられている。ライシーム運動においては、教師のみならず、家庭というインフォーマルな領域で子育てに携わる親や、ライシームにおいて自発的に学習を進める住民に対しても教授情報が提供され、彼らを「教授者」として育成することが試みられたのである。

「教授者」としての親に期待されたのは、自らの権限で子育てを行うことではない。親に求められたのは学校における教授が円滑に進むように、あらかじめ家庭において学校の教科の基本となる内容(数え方、幾何学、アルファベット、化学、地理学等)を教授し、子どもに先取り学習をさせることであった。ホルブルックはそうした状況を「家庭が学校の一部となる」と表現した⁽²⁶⁾。こうした親に期待された役割が果たされるためには、親自身が教授内容、方法、教授器具を熟知することが不可欠となる。したがって、親には親類や隣人とともに『週刊ファミリ

一・ライシーム』をテキストとして、教授に関するさまざまな情報を相互に教え合い、学び合うことが求められた⁽²⁷⁾。

教師に対しても、教授に関する情報を教師同士の「相互教授」を通して獲得することが要求された⁽²⁸⁾。さらに教師を含む教育関係者間での討議を通して、当時のマサチューセッツ州において設立が目指されていたコモン・スクールに導入すべき教授内容、方法、教授器具を検討することも期待された⁽²⁹⁾。また、住民に対してはライシームにおいて住民の教え合い、学び合う活動である「相互教授」に参加し、学習機会の創出に携わることが求められた。

このようにライシーム運動においては、親・教師・住民が定型化された教授法を一律に習得することではなく、それぞれの持ち場での「相互教授」を通して教授内容、方法、教授器具について熟知し、「教授者」として成長することが目指されたのである。

(2) 「協同」理念にもとづく教授情報の普及

このように、教え合い、学び合いを通して教授情報の普及を促し、教授の素人である親や住民を「教授者」として育成することは、教授法を定型化し専門職としての教師を養成することに比べて非効率的である。にもかかわらず、教授情報の普及が促されたのは、ライシーム運動において単にすぐれた「教授者」の育成だけが目指されていたのではないからである。教授に関わる情報を共有することにより親・教師・住民の間に協力関係を生み出し、タウン全体の利益であるコモン・スクールを全体で相互支援しようとする意識を高める。そのことが、教授情報の普及を親・教師・住民の間に促す意図であった。ホルブルックは『週刊ファミリー・ライシーム』25号（1833年2月2日）掲載のコラム「協同」（“Cooperation”）において、次のように述べている。

「同じタウンの市民（citizens）ならば、協同の原則（principle of co-operation）を受け入れ、よき意志によって一人ひとりの利益を互いに促進し合うことであろう。さらにそれを通してコミュニティ全体の利益も促進することであろう。」⁽³⁰⁾

ホルブルックは、コミュニティに生きる一人ひとりが「協同」の重要性に目覚め、互いの利益を高め合うようになることが、ひいてはタウン全体の利益につながっていくと考えた。その上で、タウン住民の学習機関であるライシーム、アメリカ合衆国民共通の学校であるコモン・スクールは「コミュニティ全体の利益」に位置づけられ、それらの機関における教育実践を住民によって相互支援してい

くことが提唱された⁽³¹⁾。こうした構想の下で、親・教師・住民を、「協同」意識を持ちタウンの利益のために相互支援し合える「同じタウンの市民」にまで育成することが目指されたのである。

そうしたことが実際に可能となるためには、親・教師・住民に対し教授に関するさまざまな情報を提供する必要がある。ただし、その際にスタンダードとして設定された教授法を提示するだけでは、相互的な関わり合いは生まれない。「協同」の理念にもとづいてライシーアム、コモン・スクールの教育実践を相互支援しようとするならば、親・教師・住民はともに教授内容、方法、教授器具について学び合い、タウン全体の利益を考慮に入れて何が自分たちにとって必要であるのか、あるいは必要でないのかを討議しなければならないのである。筆者は別稿で、ライシーアム運動において、地域住民間に「実用知識」に代表される「共有知識」(common knowledge)の普及を促すことで「協同」関係を構築し、タウンのコモン・スクールの相互支援しようとする構想がみられたことを解明した⁽³²⁾。教授情報もまた、実際に教授に携わる際のツールとしてだけでなく、個々の親・教師・住民の間に「協同」関係を構築する媒体として、その普及が促されたのである。

4. 民衆教育の構想—結論に代えて

本稿では、1830年代前半のマサチューセッツ州で高揚したライシーアム運動に注目し、同運動において目指された教授情報の普及の実際とそれを支えた理念を明らかにした。同時代の教育改革者がペスタロッチ法に依拠した教授法の導入と教師養成システムの確立を目指したのとは異なり、ライシーアム運動においては専門職としての教師のみならず、親や住民をライシーアム、コモン・スクールにおける教育実践の主体と位置づける「協同」の理念のもとで、教授情報の普及が促された。

教授法の定型化と専門職の養成に期待をかける1830年代マサチューセッツ州の教育改革の動向とは異なり、ライシーアム運動では教師・親・住民の協力関係がコモン・スクール推進の原動力とみなされ、彼らに教授情報が提供された。専門職ではなくタウンに生きる一般の教師・親・住民に信頼が寄せられたのは、共和国におけるあらゆる教育機関、学習機関は「農夫や機械工」に代表される「民衆」(the people)によって「統治」されるべきだ、とする創始者ホルブルックの民衆

教育構想があった。

ホルブルックは『週刊ファミリー・ライシイアム』22号(1833年1月12日)のコラム「ライシイアムの共和主義」(“Republicanism of Lyceum”)において、「市民社会のあらゆる機関のほとんどは共和主義に反する特徴を有している」と指摘している。ここで彼が「共和主義に反する」とみなしているのは、教育機関が一部の upper 階級のみに関わり、「農夫や機械工」といった「民衆」の「統治から離れてしまっている」ことであった。ホルブルックは教育機会に恵まれず、教育機関から退けられていた「民衆」に対して教授に関する情報を提供することで、「民衆」がコモン・スクールに代表される教育機関の担い手たる「市民」として形成されていくことを構想した⁽³³⁾。そして、そうした構想の実現のために一般の教師・親・住民に対し教授に関する情報を提供し、「教授者」ならびに教育機関の担い手としての力量を養っていくことが目指されたのである。このようにライシイアム運動においては、共和国にふさわしい民衆教育の実現、という構想のもと教授情報の普及が促されたのである。

註

- (1) 本稿は、筑波大学教育学会第三回大会発表、古川明子「ライシイアム運動における教授情報の普及とその理念—1830年代前半のマサチューセッツ州のタウンにおいて—」2004年3月20日、於：筑波大学、に加筆・修正を加えたものである。
- (2) 19世紀初頭のプロイセンにおけるベスタロッチ法の公教育への導入については、大崎功雄『プロイセン教育改革研究序説』多賀出版、1993年。平成10年度～平成13年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書、研究代表者：大崎功雄、『プロイセン・ドイツにおける近代学校装置の形成と教育方法の改革』2002年3月、参照。
- (3) 北野秋男『アメリカ公教育思想形成の史的研究』風間書房、2003年、220-239頁、参照。
- (4) 渡部晶、前掲書、129頁。川崎源は特に「第七年報」を「アメリカにおけるベスタロッチ主義に関する最も重要な文献の一つ」と評価している。川崎源『ホレス・マン研究—アメリカ公立学校発展史—』理想社、1959年、153頁。
- (5) ホレス・マン『十九世紀のヨーロッパ教育：ホレス・マン第七年報』川崎源訳、理想社、143-148頁参照。渡部晶、前掲書、113-114頁、131頁参照。
- (6) 渡部晶、前掲書、122頁参照。
- (7) 渡部晶、前掲書、232-235頁参照。
- (8) David Hogan, “Modes of Discipline; Affective Individualism and Pedagogical Reform in New England, 1820-1850,” in: *American Journal of Education*, vol. 99, (1990), No. 1, p.

12.

- (9) 北野秋男, 前掲書, 279-280頁参照。
- (10) 古川明子「ライシーム運動の再評価—1830・40年代のコンコード・ライシームにおける『相互教授』の思想と実践を中心に—」日本教育学会『教育学研究』第69巻第3号, 2002年9月, 59-68頁参照。
- (11) 古川明子「ライシーム運動における科学的知識普及の意義—ジョサイア・ホルブルック編集『週刊ファミリー・ライシーム』を素材として—」日本社会教育学会『日本社会教育学会紀要』No.39, 2003年6月, 97-106頁参照。
- (12) 古川明子「ライシーム運動におけるコモン・スクール構想—共有知識の選択に注目して—」筑波大学教育学会『筑波教育学研究』創刊号, 2003年3月, 43-55頁参照。
- (13) 古川明子「ライシーム運動における『教育委員会』構想—1830年代のマサチューセッツ州を中心に—」筑波大学大学院博士課程教育学研究科『教育学研究集録』第27集, 2003年10月, 27-36頁参照。
- (14) Ray Angela Gail, "Pupils, Spectators, Citizens: Representations of United States public culture in the nineteenth-century lyceum," *University of Minnesota (PhD. D. Dissertation, 2001)*, p. 135.
- (15) *ibid.*, p. 139, 140, 160.
- (16) 古川明子「ライシーム運動におけるコモン・スクール構想—共有知識の選択に注目して—」参照。
- (17) 筆者は論文「ライシーム運動における科学的知識普及の意義—ジョサイア・ホルブルック編集『週刊ファミリー・ライシーム』を素材として—」において、『週刊ファミリー・ライシーム』を用い、ライシーム運動における科学的知識普及の実際を分析した(日本社会教育学会『日本社会教育学会紀要』No.39, 2003年6月, 97-106頁)。「週刊ファミリー・ライシーム」には教授情報のほかに、科学的知識、ライシーム・教師養成セミナー・学校・図書館紹介、教育に関するさまざまな見解等が掲載されている。
- (18) "Experiments," in: Josiah Holbrook ed., *The Family Lyceum*, No. 1, Jul. 28, 1832. "Family Instruction," No. 28, Feb. 23, 1833. "Family Instruction," No. 29, Mar. 2, 1833. "Family Instruction," No. 30, Mar. 9, 1833. "Family Instruction," No. 31, Mar. 16, 1833. "Family Instruction," No. 33, Mar. 30, 1833. "Geography for Children," No. 16, Dec. 1, 1832. "Geometry," No. 1, Jul. 28, 1832. "Geometry," No. 2, Aug. 25, 1832. "Geometry," No. 3, Sep. 1, 1832. "Geometry," No. 4, Sep. 7, 1832. "Geometry," No. 5, Sep. 15, 1832. "Geometry," No. 6, Sep. 22, 1832. "Geometry," No. 7, Sep. 29, 1832. "Geology for Schools," No. 6, Sep. 22, 1832. "Comparative Meteorology," No. 42, Ju. 1, 1833. "American Forest Trees," No. 7, Sep. 7, 1832. "Natural History," No. 38, May 4, 1833. "Natural History," No. 42, Ju. 1, 1833. "Natural History," No. 43, Ju. 8, 1833. "Natural History," No. 44, Ju. 15, 1833. "Natural History," No. 45, Ju. 22, 1833. "Natural History," No. 46, Ju. 29, 1833. "Natural History," No. 47, Jul. 6, 1833. "Natural History," No. 48, Jul.

- 134, 1833. "Report," No. 21, Jan. 5, 1833.
- (19) "Family Instruction," No. 28, Feb. 23, 1833.
- (20) "Geology for Schools," No. 6, Sep. 22, 1832.
- (21) "Natural History," No. 38-48.
- (22) "The Book of Nature," No.17. Gail, op.cit., p. 163.
- (23) Henry Barnard, "Josiah Holbrook," *American Journal of Education*, 8 (1860), p. 240.
- (24) "Apparatus for Lyceums, Schools, and Families," No. 16, Dec. 1, 1832.
- (25) "List of Approved School Books," in: *The Family Lyceum*, Extra, 1833.
- (26) "Family Education," No. 16, Dec. 1, 1832.
- (27) "Prospectus of the Family Lyceum," No. 1, Jul. 28, 1832.
- (28) Josiah Holbrook, *American Lyceum, or Society for the Improvement of Schools, and Diffusion of Useful Knowledge* (Boston: T. R. Marvin, 1829), p. 3.
- (29) 実際に、1831年から39年に全米規模で開催された「アメリカン・ライシーアム」(American Lyceum)という教育関係者の大会では、コモン・スクールにおいて教えられるべき内容、採用されるべき方法、教授器具に関する討議がなされた(古川明子「ライシーアム運動におけるコモン・スクール構想—共有知識の選択に注目して—」43-55頁参照)。
- (30) "Cooperation," No. 25, Feb. 2, 1833.
- (31) ライシーアム運動の創始者ホルブルックは、コモン・スクールをタウン住民共通の「財」とみなし、コモン・スクールを住民によって相互支援する構想を打ち出した。詳しくは古川、前掲論文、51頁。
- (32) 古川、前掲論文、51-52頁参照。
- (33) "Republicanism of Lyceum," No. 22, Jan. 12, 1833. 傍点は原文イタリック。

【謝辞】

本論文に対し匿名の査読者から貴重なアドバイスをいただいた。この場を借りて謝意を表したい。